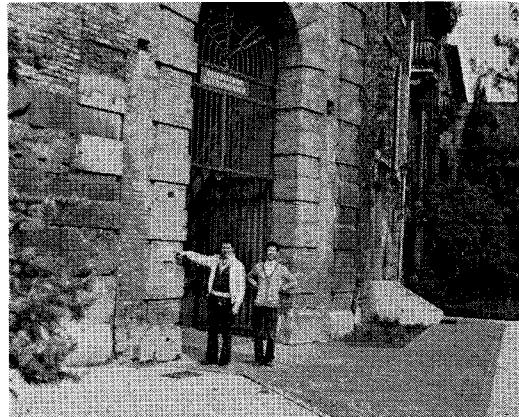


## イタリアからの手紙

飯 島 孝\*

日本の皆様、いかがお過しでしょうか。早いもので、僕が日本を離れて、もう2年になります。僕が出てきた時にはまだインベーダー・ゲームという物は、なかったから、日本の様子もかなり変わったことだと思います。こちらでの2年間は、本当にあつという間に過ぎてしまいました。イタリア語は、まだよくわかりません。最近ようやく、イタリアでの生活に慣れてきたかな、といったところです。来る前は、旅行なども色々やってみたいと思っていたましたが、なにしろ観測所の外に出ると、イタリア語をしゃべらなければいけないので、ついおっくうになってしまい、まだ、ほとんどやっていません。それでも、先日、ようやく一つ仕事が片付いたので、休養も兼ねて、南イタリアのマラテアで開かれたNATO主催の連星の研究会に行ってきました。もっとも僕は特に連星の仕事をやっているわけではありません。海のそばだから海水浴が出来て、うまい魚が食べられるだろう、という不純な動機で参加したのです。

研究会では RS CVn 型星など、特殊な連星の光度曲線の解析などが話題になっていたようです。日本語で説明されてもよくわからないような事を英語でやられるので、話の内容はほとんど聞き取れず、ただ、グラフや数式などから、どうもそんな話をしているらしいと推測しただけです。そのうち集録が出るはずだから、興味のある人はそれを読んで下さい。50人そこそこの、小じんまりした研究会で、わりと和気あいあいという感じでやっていました。この研究会にはプログラムという物がないのです。コバール先生が前の日に誰かの所に行って「明日これこれの事について、このくらいの時間で話して下さい。」と言って進めていくのだそうです。わりと柔軟性があるので、僕もちらで一緒に仕事をしているマンマーク先生から売り込んでもらって、飛び入りで10分ほどしゃべらせてもらいました。短い時間だったので、何とかボロは出ないですんだみたいです。多少分野が違うせいか、質問は全然出ませんでした。ひょっとして言葉が通じなかったのではないかと思って、アメリカ人に「僕の言葉はわかったか。」と聞いたら、理解できたということなので安心しました。しかし、「中学から大学まで8年間英語の勉強をしたんだ。」と言ったら、「日本では英語の時間に何を教えているんだ。」と言われてしまいました。やはり、かなりひどい英語ではあ



パドバの天文台本館。ガリレオが講義をしていた建物が今でも使われています。

ったようです。

朝から晩まで食事も一緒で、2週間も付き合っていると、皆の人柄がわかってきて面白いです。IUE の女親分のハック先生は、最初見た時は、「こわそうなおばさんだな。」と思いましたが、実際には、とても気さくな人でした。かつてイタリアの陸上競技の女子短距離界のエースだっただけあって、ものすごく元気がよく、研究会の最初の頃、天気が悪く、寒くて僕などはセーターを着ていた時でも、近くの海で平気で泳ぎまわっていました。コバール先生は講演の時は、もちろん世界中の研究者と渡り合って大変な勢いででしたが、それ以外の時は、若い御婦人方ばかり追いかけまわしていたみたいです。特にポーランドから来た美人でグラマーな女の子に夢中になってしまって、ダンスをしたり、ほっぺたにキスしたりで、まったく手が付けられない感じでした。いつまでも若々しいのは結構なのですが、根は、やはり、かなり数奇者のようです。一般に外国の先生方は、日本に来た時は緊張して行いを慎んでいるみたいです。こちらに来て会ってみると、また別の面を見発見することが出来て面白いです。休みの日には皆でポンペイやパエストゥムなどの古代の遺跡を見学に行ったりして、楽しい研究会でした。

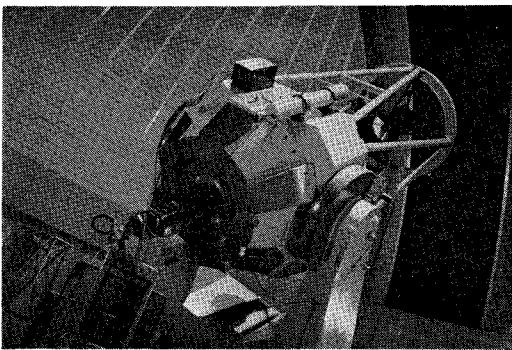
次に僕が普段生活している、アジアゴを紹介します。アジアゴはベニスの北西 100 km くらいの所にあります。アルプスが南に向って、だんだん低くなってきた、その南端にあたる標高 1000 m くらいの高原にある、人口約 8000 人の小さな町です。北緯 46 度だから、日本

\* イタリア パドバ大 Takashi Iijima:

だと宗谷岬の少し北になるわけですが、それほど寒くはありません。自然環境は軽井沢と同じと思っていただければ、ほぼ間違ないです。冬のスキーと夏の避暑の季節には、かなりにぎわいます。今はのどかな保養地になっていますが、第一次世界大戦、有数の激戦地でもあります。戦没者慰靈塔や無名戦士の墓があちこちにあり、近くの山の中には、ざんぐうやトンネルが今でも残っています。

ここに 122 cm の望遠鏡と 67 cm と 40 cm のシュミット望遠鏡があります。それから、1973 年に完成した 183 cm の望遠鏡は、観光地として発展してきたアジアゴの光害を逃れて、4 km くらい離れたエカーレ山に設置されています。183 cm の方は岡山の 188 cm とまったく同じ設計だそうです。ナスマス焦点での写真撮影やカセグレン焦点での高、低分散の分光など汎用望遠鏡として使われています。マックス・プランク研究所に来ていた西村徹郎氏達の製作になる、BANZAI という名前の近赤外用ファブリペロー分光器もあります。122 cm の方は分光専用です。こちらの方は、今でこそこの観測所の第二望遠鏡になっていますが、建設当時はヨーロッパ最大、この観測所開設以来 40 年近くも常に現役で働いている歴史的な望遠鏡です。なんでも主鏡はヒットラーがムッソリーニに贈ったものだそうです。分光観測に関しては今でもこちらの方が、新しい 183 cm のより優れているようです。

ここでは、この観測所の人とパドバ大学に籍のある人を合わせて 15 人くらいが仕事をしています。台長は数年前に日本にも来たことのあるロジノ先生です。この先生はもう 65 才くらいになるのに、元気のいい事は天文台で一番です。若い連中を相手に、夜中の 2 時や 3 時まで議論をしていることも、めずらしくありません。へたにつかまると 3 時間くらい離してもらえません。「仕事を見てやるから来い。」と言われると、それまでの数ヶ月間に撮ったスペクトル乾板を全部持っていくとい



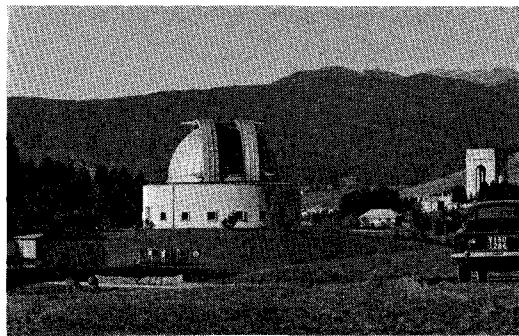
183 cm 望遠鏡と近赤外用ファブリ・ペロー分光器 BANZAI.

けません。それを、一つ一つ見ながら、ああだ、こうだと言ってくるので、こちらは警察で取調べでも受けているような気分です。たくさん観測をやったので、ほめられるかなと思ったら、「これだけデータがあって、なぜ論文が書けないのだ。お前はそれでも研究者か。さっさと論文を書いて持ってこい。2 週間以内に書けなければ研究者として認めてやらん。」と言われました。背筋が寒くなるような事を平気で言うから恐しいです。ただ、歳のせいできますが記憶力は弱くなっているみたいで、言った事をすぐ忘れてくれます。期限を大幅に超過して、二ヶ月くらいかかる、やっと一つ書いて恐る恐る持っていましたが、文句は言わませんでした。

ロジノ先生が新星の観測の大家だから、その関係でここでは新星やそれに関連した天体、惑星状星雲、長周期変光星などの研究が多くやられています。HR 図の中で赤色巨星と白色矮星の間にある天体に興味が集まっているみたいです。こちらに来る前に「イタリア人はのんびりしていて、ろくに仕事をしないから、お前もボケちゃうぞ。」なんて言われたけれど、どうして、どうして、皆よく仕事をやっています。月に一つずつ論文を発表している気違いみたいな人は別にしても、それぞれ年に二つか三つくらいは論文を書いているようです。天文台としては、かなり活発に活動している部類に入るのではないかと思います。

こちらの研究者を見ていて、日本と違うなと思う所が一つあります。それは日本の研究者はよく「世界のレベルはこのくらいだから、日本のレベルはこのくらい。」などと言いますが、こちらの研究者は絶対に、イタリアのレベルがどうだ、などとは言わないという事です。そもそも最初から、自分達のやっている事と別に、何か抽象的な、世界のレベル、なる物があるというような考え方を持っていないようです。もちろん、ここにいるすべての人が世界の最先端の仕事をやっているわけではないと思いますが、それはまたそれで、別の所で天文学の全体としての発展に寄与していると考えているようです。それは歴史的に、近代科学を育ててきた所とそれを輸入した所の違いかも知れません。しかし、それにしても、日本の研究者は、どうも自分達の活動範囲を狭くしきているのではないでしょうか。日本も既に先進国、それもかなり上位の仲間になってきたわけで、これからは、科学を育てる役割を受け持たなければいけないのではないかと思います。そろそろ、世界と日本といった団体から離れて物を考える必要があるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

最後にイタリアでの日常生活について触れておきます。最近は日本人の生活も、ずいぶん洋風化しているので、こちらに来ても、それほどとまどう事はありません



歴史的な 122 cm 望遠鏡とドーム。右手後方が戦没者慰靈塔。

ん。イタリアは日本と気候が似ているので、野菜、果物、魚介類、などは日本のとほとんど同じ物があります。現在では、もう厳密には守られていませんが、キリスト教では魚は金曜日以外の日には食べてはいけないことになっているのだそうです。そのため、アジアゴのような田舎の町では、今でも魚屋は金曜日の午前中しか店を開きません。だから金曜日には、いつも早起きをして魚を買いに行きます。イワシ、サバ、いか、あさり、などがあります。うなぎもあるけれど、これはこちらでも高いし、青大将の兄貴みたいなのをぶつ切りにして売っているので、あまり買う気になれません。先日はイワシを大量に買ってきて、宿舎の窓につるしておいて、丸乾しを作りました。イタリア人は「あの魚のカーテンはなん

だ。」なんて言って驚いていましたが、実際に一つ焼いて食べさせてやったら「意外とおいしい。」と言っていました。食べ物の好みなどでも、それほど極端な違いはないみたいです。もっとも、これも細い点では色々違ったって、時々、返答に困るような質問をされることがあります。例えば「なぜ、お前は御飯を炊く前に米を洗うんだ。」とか「なぜ、焼き魚を食べる時にサラダ油をかけないのか。」とか。イタリア人にとっては、焼き魚に油をかけないで食べる原因是、刺身にたれを付けないで食べるようなものらしいです。それから、日本からお茶を送ってもらった時など、少し飲ませてやったりしましたが、「絶対に砂糖を入れなくちゃいやだ。」なんて言うから、最近はもう飲ませてやっていません。

まあ、色々な事はありますが、2年間生活してみた感想は「人間のやる事なんて、何処へ行っても同じだな。」という事です。日本人はどうも、自分達は非常に特殊な人間で、日本でやっているような事は外国では通用しないのではないかなどと考えがちですが、そんな事はなさそうです。最近は安定指向とでも言うのでしょうか、若い人の間でも「外国になんか行きたくない。」と言う人が多いみたいですが、もっと自信を持って、どんどん外国へ出ていって、国際的な場で仕事をやってみたらどうでしょうか。若手の奮起を期待したいです。

それでは皆様、ごきげんよう。さようなら

1980年8月31日

## 学会だより

### 日本天文学会昭和55年度秋季年会記事

昭和55年度秋季年会は岩手県水沢市の水沢市役所講堂に於て 10月21日(火)～10月24日(金)の4日間にわたって開催された。講演数 139、出席者数約 250名、各セッションの座長は次の方々にお願いした。

21日午前 古在由秀、小平桂一 (講演数 18)

午後 会津晃、奥田治之 ( " 23)

22日午前 杉本大一郎、加藤正二 ( " 17)

午後 高瀬文志郎、小暮智一 ( " 24)

23日午前 藤本光昭、坪川家恒 ( " 17)

午後 須川力、堀源一郎 ( " 23)

24日午前 高倉達雄、平山淳 ( " 17)

10月21日の昼に内地留学奨学金選考委員会、22日夜には懇親会、23日の昼に理事会が開かれた。24日の午後にはエクスカーションとして緯度観測所江刺地球潮汐観測施設の見学会が開かれ参加者は約 40名であった。

### 内地留学奨学金

年会中に開かれた内地留学奨学金選考委員会において申請のあった4名の候補者について選考を行った結果、次のように決定した。

◎藤森賢一 (農業)

研究題目: 「プロミネンスの活動と黒点活動の周期性について」

留学先: 東京天文台太陽物理部

奨学金: 18~20万円

### 昭和56年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので、本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第1段審査委員候補者: 小平桂一、高瀬文志郎

なお、現在の第1段審査委員は、加藤正二、高窪啓弥の両氏、また第2段階審査委員は川口市郎氏です。